

小兒の傳染病

|| 兒童保護講演梗概 ||
豐 福 環

私は本心から皆様の御熱心を感謝いたします私は通俗講演を致したことがありませんから是から御話いたすことも自然難しくなるかも知れません。

皆さん御存知の通り小兒にも大人と同様種々の病氣があります。而して小兒は身體の抵抗力が弱く爲其の経過は大人と違ひ少しの油斷手當の誤りから大事を起すことが多くあります。殊に生後間もない者程其の度が強いのであります。

凡て小兒の病氣は親の不注意から起るものであります。其れ故親たる者は衛生思想を養つて小兒の病氣については其の種類位は見當がつく様にせねばなりません。私は以下小兒の傳染病に就て申し上げたいと思ひます。

小兒は大人と同様の傳染病に罹りますが麻疹猩紅熱デフテリア等は小兒特有の傳染病といつてよいものです。

傳染病は總て一度罹ると免疫となるものです。例

へば麻疹は一度罹れば大抵免疫となります。然し稀には二度三度罹ることもあり得ます。其の場合でも一度より二度、二度より三度目と次第に輕症になるものです。

傳染病は病人に近寄るか又は其の分泌物に觸れなければ傳染するものでありませんから保護者の注意によつて小兒の傳染病は充分に豫防することは出来ます。

従來小兒の傳染病殊に麻疹等に就ては輕視する傾向がありましたが假令それが普通の傳染病であつても小兒は其のため、合併症を生ずることが多いから決して輕視してはなりません。

病氣は看護を第一とします。然し其の治療の方法に就て誤れる場合が往々あります。例へば麻疹は冷すなどいひますがこれは合併症たる結核症を起す懼れがあるからであります。其れを誤解して冷すなどいふからといつて溫める人があります。その爲に却

つて心臓を衰弱せしめ脳膜炎等を併發せしめることがあります。

今日醫學の進歩は盛んなものでありますが未だ病氣の種類によつては病原菌の不明なものがありましてかゝる病氣に對しては對症療法によるより外に方法もありませんが病源の明かになつた病氣に對しては夫々完全なる療法がありますから保護者は小兒の病氣に就ては早く醫師の診療を乞ふのがよいのであります。以下小兒特有の傳染病について其の症狀合併症治療法等について申述べたいと思ひます。

(一) 麻疹

(1) 症狀。

(a) 初め兩三日は三十八度から九度位の發熱後不機嫌となり咳をします。此の頃は何病とも不明であります。

(b) 一旦下熱して半日又は一日位の後急に四百度から四十度五分位の發熱があり同時に發疹します。發疹は赤色で初め顔面脊等に現はれ四日目位で手足に及びます。かうなる熱は下ります。

(c) 發熱の際腦の過敏な小兒はひきつけることがありますがこれは暫時で恢復するもので決して心配する程のものではありません。

けれども後に合併症として脳膜炎を起してひきつける時は油斷をしてはいけません。

(d) 發熱後四日位で下熱のしないのは合併症を發した爲です。から注意せねばなりません。又發疹が次第に薄れゆくは順調ですが急に紫色に變ずるのは心臓の衰弱した證で重症であります。

(2) 合併症。

麻疹は表皮と粘膜に發疹するものですから其の合併症としては氣管枝加答兒、鼻加答兒、咽喉加答兒、中耳炎、肺炎等があります。其の中一番恐るべきは肺炎であります。

(3) 治療法。

病原不明の爲、特效藥がありません。氣管に異狀のない時は可成的涼しい室に靜臥させるがよいとしてあまり熱の高い時は腦や心臓を冷すことも必要である。若し氣管に故障のある時は普通の感冒と同様の手當を要します。

麻疹の流行期は毎年秋から晩春にかけて、其の傳染力は強く空氣傳染をするから流行期には保護者は小兒を人混みの中へなど連れ出さぬ様にしなければなりません。

(二) 猩紅熱

本病は古くは日本にはありませんでしたが日露戰爭後頃から流行し始めました。

(1) 症状

(a) 麻疹に類似して更に悪性のものであります。發疾は麻疹より小粒で全身に及びます。先づ咽喉に入つてデフテリアの様に白色を呈します。

(b) 落症期は一週間位で皮膚が大きく剝脱します。

(c) 麻疹より傳染力は弱いが病原菌は長く生存し罹病者の死亡率も百分の十乃至三十に及んで居ります。

(2) 合併症

落症後三週目位に腎臟炎を起すことがあります。

(3) 治療法

法律上届出をなし隔離する必要があります。

(二) デフテリア

命を奪ふ病氣ですから注意を要します。咽喉デフテリアより喉頭デフテリアは危険性のもので呼吸困難の爲に死亡することが多いのであります。

(1) 症状

病原が扁桃腺に入り不機嫌となり吐氣を催し特異の咳(犬咳)をします。

(2) 治療法

血清注射を行います。血清注射は手遅れとなる時は效力がありませんから注意せなければなりません。又血清注射は二回行ふ時は含有する蛋白質の爲に危険状態に陥ることがありますから嘗て豫防注射(豫防注射は行はない方がよい)を施したものは本症の場合に醫師に注意するを要します。

(四) 百日咳

(I) 發熱はありませんが肺炎の爲に死亡する率が

割合に多いものであります。若し發熱した時は合併症のある證であります。

(2) 傳染力は強いが咳を受けなければ傳染することはありません。

(3) 病原菌は大體判明し注射を行います。これは血清注射ではありませんで五六回行ふ必要がありません。

(4) 發熱のない爲患者は諸所を歩いて傳播することがあるから公徳心によつて患者は外出しない様にして貰ひたい。

私のお話したいことはこれだけです。長い間御静聽下さつたことを感謝いたします。(未校閲ニ文責在記者)

講演 移動託兒所 會場に

近頃婦人の知識向上の聲が盛になるに従つて、婦人に對する講演又は講習的のものが續々と芽を出して來るが、然しこれに出席せんとする婦人も子供のある爲めにどうしても足が向き兼ねる、此問題は婦人連中には最も不便を感じることである、これに就て内務省の田子社會局長は語る『此問題は婦人連から度々聞くことで私の考へとしては此際最も進歩し且つ最も簡単な方法として『移動託兒所』なるものを作つたらどうかと思ふ、その方法としては或一定の本部に娼婦を數名置いて、各講演會場又は學校等の講習所等へは一つ臨時の託兒室を設け其會で移動託兒所から一二名の娼婦を恰も何か會があると赤十字病院の看護婦出張せる如く出張を乞ひ、講演傍聴又は講習に來る子持ちの婦人の子供を一時間なり二時間なり、其講演又は講習の終るまで、相當の託兒料を支拂つて子守を依頼して置くといふ風にすれば自宅へ下女に託して來るよりも安心が出來且つ便利である、外國には此方法のあることを一寸聞かぬが、獨り講演場講習會場の親切と社會事業家の小さい努力とで此大なる婦人知識向上の目的を可成り救助することが出來ると考へる』